

中川順子先生のご退職にあたって

國廣 敏文*

中川順子先生のご退職・最終記念講演にあたりまして、学部を代表して、先生のご経歴を簡単にご紹介させていただきます。

中川先生と私は立命館大学への赴任時期が同期でして、今年度定年を無事迎えられたということ、一面では喜ばしいことですが、寂しくもあり、学部長として先生のご紹介をさせていただくということで感慨深いものがあります。先生の研究の特徴、研究のテーマに関しては、本年度4月から産業社会学部に専任教員となり、中川先生のもとで研究を進めてこられた斉藤真緒助教授に、この後でご紹介いただきたいと思います。

中川先生は1960年代に、北海道大学文学部ならびに同大学文学研究科で社会学をおさめられました。1968年に北海道の名寄女子短期大学専任講師となったのを皮切りに、さまざまな大学で教育を積み重ねられ、1990年4月に立命館大学産業社会学部教授として赴任され、今日に至るまで15年間教鞭をとられてきました。学内の教学を支える上でも、1996年度に学生主事を、2003年度には研究科主事と大学院委員の役職を務められるなど、大学と学部、院生・学生の教育のために貢献してこられました。

産業社会学部では「比較ジェンダー論」をメイン科目とされ、働く人たちの生活、家族、ジェンダーの問題を正面から取り上げて、これらの問題状況に対して真正面から政策的な提起を行うと同時に、多くの学生や院生を育ててこられました。

この間に日本の社会は、急速に少子高齢化社会へと変貌を遂げるとともに、経済のグローバル化やそれに伴う労働環境や雇用構造の変化、環境問題の深刻化、都市化の一層の進展や情報環境の急速な変化の中で、家族や女性、子どもを取り巻く状況も変化し、新しい困難や諸問題が生まれ、悲惨な事件も相次ぐなど、家族や生活のありようの問題は、今や今後の日本社会の行く末を考える上で避けて通ることのできない重要な政策課題となってきました。中川先生は、こうした時代の状況と課題に対して、地域での調査・研究やノルウェーを中心とした海外での調査・研究の成果をもとに、新たな方向性を一貫して提起されてきました。

このように中川先生は、教育、研究、公務それぞれの面で大いに活躍をされてきました。先生は今年で定年を迎えられるので、「これからはごゆっくりとなさってください」と申し上げたとこ

* 立命館大学産業社会学部長

ろですが、まだまだお元気で、若々しい気持ちと活力を持っておられます。今後は我々の“先輩”という立場で、学部教学に大所高所からお力添えいただければと思います。私たちは、中川先生が取り組んでこられた諸課題をそれぞれの立場から引き受け、今後の研究の推進と、学部、大学院教育に邁進しなければならないと決意を新たにしているところです。

最後になりましたが、これまでの先生のご業績に敬意を表しますとともに、本学部ならびに大学へのご貢献に感謝いたします。これまで15年間の長きにわたってありがとうございました。これからもお元気でご活躍ください。私からの挨拶とさせていただきます。